

# 奈良県の伝統野菜 ‘大和マナ’の来歴についての検証

誌名	奈良県農業総合センター研究報告
ISSN	18821944
著者名	西本,登志 北條,雅也 浅尾,浩史 米田,祥二 後藤,公美 堀川,大輔 黒住,徹
発行元	奈良県農業総合センター
巻/号	39号
掲載ページ	p. 42-46
発行年月	2008年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 奈良県の伝統野菜‘大和マナ’の来歴についての検証

西本登志・北條雅也・浅尾浩史・米田祥二・後藤公美・堀川大輔・黒住 徹

The Inspection on the Origin of Tsukena (*Brassica rapa* L.) ‘Yamato-mana’, the Traditional Vegetable of Nara

Toshi NISHIMOTO, Masaya HOJO, Hiroshi ASAO, Hirotosugu YONEDA, Hiromi GOTO,  
Daisuke HORIKAWA and Toru KUROZUMI

Key Words : traditional vegetable, Tsukena, *Brassica rapa* L.

### 緒 言

奈良県は、戦前から生産されているとされる野菜15品目を「地域の歴史・文化を受け継いだ独特の栽培方法等により、味・香り・形態・来歴等に特徴を有する野菜」に位置付け、「大和の伝統野菜」として認定している。その中の‘大和マナ’（第1図）はツケナ (*Brassica rapa* L.) に属し、降霜後に美味しくなる<sup>16)</sup>とされ、主に晩秋から冬にかけて生産されている。奈良県農業総合センターで選抜・維持している系統の他、県内の種苗会社で生産・販売されている系統、生産者自らが自家採種を行い維持している系統が存在しており、いずれも、雑駁性を有する固定種である（第1表）。フカセ種苗が販売する‘中晩生丸葉真菜’と‘晩抽性切葉真菜’には品種名に「大和」という語が含まれていないが、これらも県内在来であるため、こ

こでは品種群としての‘大和マナ’に含まれるものとして扱う。

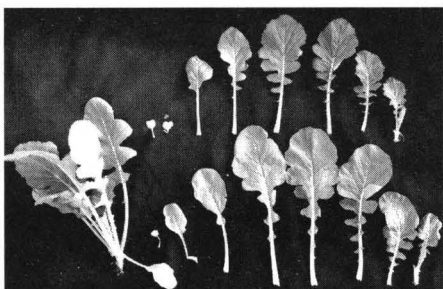
泰松<sup>17)</sup>は、‘大和マナ’は採油用として古くから栽培されていたものが野菜用として栽培されるようになったとしているが、その事実を確認できる資料は他に見当たらない。そこで、本報では、‘大和マナ’の来歴を検証することを目的に、県外に存在するといわれている‘マナ（まな、真菜）’の検索を行い、得られた情報をもとに、‘大和マナ’との類似性と歴史的背景を現地・文献調査し、種子の入手が可能な品種・系統は栽培・観察した。

なお、この調査は、主にJST、奈良県地域結集型研究開発プログラム「古都奈良の新世纪植物機能活用技術の開発」の一環として、また一部を、農林水産省「先端技術を活用した農林水産研究高度化事業（課題名：近畿地域の伝統野菜の高品質安定生産技術と地産地消モデルの開発）」により実施した。

### 調査方法

2006年7月11日付文書により、呼称が‘マナ’に類する、あるいは‘大和マナ’に形態的特徴が類似するツケナの有無について全都道府県の野菜振興担当課長に照会した。その際に示した‘大和マナ’に関する情報は以下の通りである。

1. 分類 アブラナ科在来ナタネ *Brassica rapa* L.
2. 形態的特徴
  - 1) 葉はダイコン葉に類似するが毛じは少ない。



第1図 ‘大和マナ’（農業総合センター系統）

第1表 ‘大和マナ’の採種状況

採種者	所在地	品種・系統名	採種開始時期	導入元
フカセ種苗(株)	天理市	晩抽性切葉真菜・ 中晩生丸葉真菜	1962年より以前	晩抽性切葉:奈良市大安寺の農家 中晩生丸葉:田原本町の農家
(株)大和農園	天理市	大和真菜	1964年より以前	不明、おそらく近隣農家
ナント種苗(株)	橿原市	大和真菜	1965年より以前	不明
上田喜章	大和高田市	上田系統	1988年	不明
奈良県農業総合センター	橿原市	農業総合センター系統	1989年より以前	不明

- 2)葉身部には不規則な楕円形をした頭葉と翼葉が見られる。
- 3)葉は緑色で気温の低下に伴い濃くなる。
- 4)葉面は滑らかでやや光沢がある。
- 5)葉柄は淡緑色である。
- 6)根の基部は生育が進むにつれ肥大する。

次いで、文書による調査で得られた情報をもとに、現地調査、電話による聞き取り調査および文献調査を行った。現地調査は、2007年2月21日と同年3月25日に大阪府豊能郡豊能町高山地区、2007年3月2日に沖縄県国頭郡伊江村、2007年4月24日に敦賀市山集落においてそれぞれ行った。また、‘畑菜’（タキイ種苗）、‘姫路若菜’（山陽種苗）、および‘関西ま菜’（トーホク）は2006年10月17日に播種し、翼葉の有無と葉柄色を同年11月20日に観察した。さらに、上記3品種に加え、福井県の‘マナ’、大阪府の‘高山真菜’、沖縄県の‘マーナ’、および‘大和マナ’2品種・系統について、種皮型と種子色を2007年8月28日に調査した。種皮型は清水ら<sup>5)</sup>の方法に従い20粒の種子を分別し、種子色はシャーレに種子を敷き詰め観察した。

結果および考察

30道府県から回答が得られ、呼称が‘マナ’に類する、あるいは‘大和マナ’に形態的特徴が類似するとして報告されたツケナは、福井県の‘マナ’、京都府の‘畑菜’、大阪府の‘高山真菜’、兵庫県の‘姫路若菜’、和歌山県の‘マナ’並びに‘まな’、岡山県の‘土居分小菜’および沖縄県の‘マーナ’であった(第2表)。<sup>1)</sup> ‘土居分小菜’は、根部がやや赤みを帯び<sup>1)</sup>、回答文書に添付された写真から葉身が細長く、翼葉が連続的であることから、‘大和マナ’とは本葉の形が異なると判断された。

1. 呼称が‘マナ’に類する、あるいは‘大和マナ’に形態的に類似するツケナについて

第3表に現地調査、聞き取り調査、栽培調査および種子調査の結果を示した。

1) マナ(福井県)

分布地は敦賀市山集落であり、集落を流れる黒河川に因み最近では‘黒河まな’と呼ばれている。種子は山生産組合が自家採種により生産維持している。利用部位は主として花蕾であり、販売形態は花蕾を用いた漬物と摘み取り園である。いず

第2表 呼称が‘マナ’に類する、あるいは‘大和マナ’に形態的特徴が類似するツケナに関する各道府県からの回答状況(2007年8月31日現在)

道府県名	有無	呼称
北海道	無	
青森県	無	
岩手県	無	
宮城県	無	
山形県	無	
埼玉県	無	
神奈川県	無	
山梨県	無	
長野県	無	
静岡県	無	
石川県	無	
福井県	有	マナ
愛知県	無	
滋賀県	無	
京都府	有	畑菜
大阪府	有	高山真菜
兵庫県	有	姫路若菜
和歌山県	有	マナ、まな
島根県	無	
岡山県	有	土居分小菜
広島県	無	
山口県	無	
愛媛県	無	
高知県	無	
福岡県	無	
長崎県	無	
大分県	無	
宮崎県	無	
鹿児島県	無	
沖縄県	有	マーナ

第3表 文書による調査で情報が得られたツケナ(‘土居分小菜’を除く)と‘大和マナ’との比較

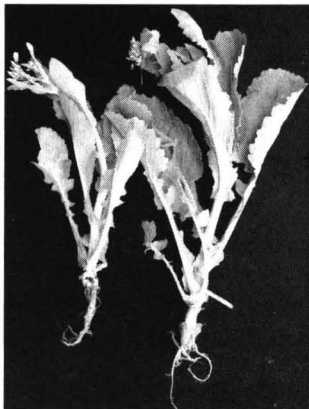
呼称	分布地域	採種者	利用部位	葉柄色 <sup>z</sup>	種皮型(%)		種子色	
					A型	B型		
マナ	敦賀市山集落	山生産組合	主に花蕾、一部抽苔前の茎葉	有	緑	40	60	黒褐色赤褐色(僅かに黄色)
畑菜	京都市	タキイ種苗(白茎畑菜) <sup>y</sup>	主に抽苔前の茎葉、一部花蕾	有	緑	85	15	黒褐色>赤褐色
高山真菜	大阪府豊能郡豊能町高山地区	高山地区生産者	冬季・抽苔前の茎葉、春先・花蕾	有	緑	100	0	黒褐色<赤褐色
姫路若菜	姫路市	山陽種苗	抽苔前の茎葉	有	白	85	15	黒褐色≐赤褐色
マナ	和歌山市・海南市	(株)トーホク(関西ま菜)	抽苔前の茎葉、花蕾	有	緑	0	100	黒褐色<赤褐色
まな	橿本市	生産者(「関西ま菜」をもとに採種)	花蕾	有	- <sup>x</sup>	-	-	-
マーナ	沖縄県国頭郡伊江村	自生	抽苔前の茎葉、花蕾	有	緑	55	45	黒褐色>>>赤褐色
大和マナ	奈良県	ナント種苗(大和真菜)	抽苔前の株茎葉	有	緑	95	5	黒褐色>>>赤褐色
		奈良県農業総合センター		有	緑	90	10	黒褐色≐赤褐色(僅かに黄色)

<sup>z</sup> ‘マナ’(福井県)、『高山真菜』および‘マーナ’は現地調査し、その他の品種・系統は奈良県農業総合センターで栽培調査した。

<sup>y</sup> 括弧内は品種名

<sup>x</sup> 未調査

れも山生産組合が管理している。本葉には翼葉がみられ葉柄は緑色であった(第2図)。種皮型はA型とB型が混在した。ま

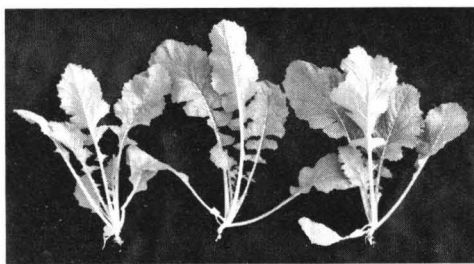


第2図 福井県の‘マナ’

た、黒褐色の種子と赤褐色の種子がほぼ同じ割合で混在し、僅かに黄色の種子が混じった。

2) 畑菜(京都府)

分布地は京都市であり、種子はタキイ種苗が‘白茎畑菜’として販売している。主に抽苔前の株が利用される。本葉には翼



第3図 ‘白茎畑菜’(タキイ種苗)

葉がみられ葉柄は緑色であった(第3図)。種皮型は85%がA型であり、黒褐色の種子が赤褐色の種子に比べ多く存在した。

3) 高山真菜(大阪府)

分布地は能勢郡豊能町高山地区である。種子は自家採種により生産維持されている。利用部位は、冬季は抽苔前の株、春先は花蕾である。本葉には翼葉がみられ、葉柄が緑色であつ

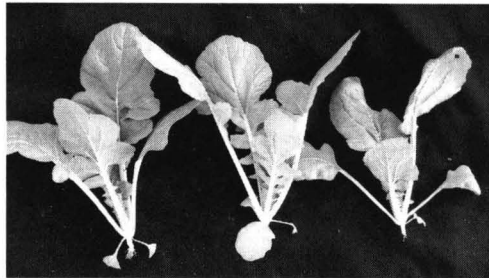


第4図 ‘高山真菜’

た(第4図)。種皮型はA型であり、赤褐色の種子が黒褐色の種子に比べ多く存在した。

4) 姫路若菜(兵庫県)

分布地は姫路市であり、種子は山陽種苗が販売している。抽苔前の株が利用される。本葉には翼葉がみられたが、葉柄

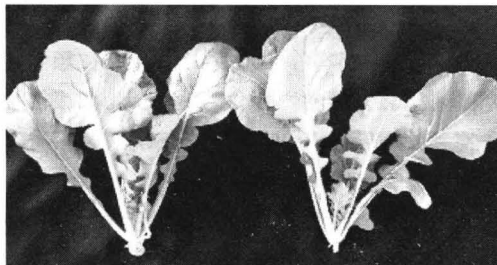


第5図 ‘姫路若菜’(山陽種苗)

は白色であった(第5図)。種皮型は85%がA型であり、黒褐色の種子と赤褐色の種子がほぼ同じ割合で存在した。

5) マナ・まな(和歌山県)

分布地は、‘マナ’は和歌山市と海南市、‘まな’は橋本市である。現在は、和歌山市・海南市ではトーホクの‘関西ま菜’、橋本市では‘関西ま菜’から自家採種し維持している系統がそれぞれ用いられているが、古くは、‘関西ま菜’ではなく伝統的な自家採種系統が栽培されたとされる。抽苔前の株と花蕾が利用される。‘関西ま菜’(トーホク)は、本葉に翼葉を有し、葉柄は緑色であった(第6図)。また、‘関西ま菜’(トーホク)は、



第6図 ‘関西ま菜’(トーホク)

種皮型がB型であり、赤褐色の種子が黒褐色の種子に比べ多く存在した。

6) マーナ(沖縄県)

沖縄県国頭郡伊江村、すなわち伊江島に自生している。利用部位は摘み取り野菜としての葉や花蕾であり、栽培は行われていない。本葉には翼葉がみられ、葉柄は緑色であった(第7図)。



第7図 ‘マーナ’

種皮型はA型とB型が混在し、黒褐色の種子が赤褐色の種子に比べ遙かに多く存在した。

2. 来歴について

‘大和マナ’の分類に関する記述は極めて少ない。最も古い

記載が1964年の青葉<sup>1)</sup>の報告であり、‘大和マナ’(大和農園)を*B. campestris* (現在一般的に用いられる学名：*B. rapa* L., 以下、学名の後の括弧内も同様)に分類している。また、前述のように、1995年に秦松<sup>17)</sup>は古くから栽培されていた採油用のナタネが野菜として利用されるようになったとし、2006年に北條<sup>4)</sup>は‘大和マナ’(奈良農総系統)を他のツケナ類と比較し、形態的に‘畑菜’に近く、*B. rapa* L. Oleifera Groupに分類されると報告している。

また、1960年以前の県内種苗会社における販売実績は確認できていない。

福井県の‘マナ’について、岩本<sup>6)</sup>はマナ栽培に関する資料が見当たらず来歴は不明であるとし、‘高山真菜’に関して、高山地区文化財調査団<sup>18)</sup>は昭和30年代には「ゴボウ→マナ→小豆→マナ→ゴボウ」の体系での作付けがあったと報告している。なお、‘マナ’に類する呼称のツケナが存在した敦賀市、大阪府豊能町、和歌山市および沖縄県伊江村、並びに、‘大和マナ’を販売する種苗会社の所在地である天理市と橿原市、それぞれの市史、町史および村史には‘マナ’、‘まな’、‘真菜’あるいは‘マーナ’に関する記述はない<sup>5, 8, 19, 20, 21, 23)</sup>。

呼称が‘マナ’に類するツケナについて、渋谷<sup>14)</sup>は‘真菜’を*B. Rapa* (*B. rapa* L. Rapifera Group)に分類し、青葉<sup>1)</sup>は‘大和マナ’(大和農園)のほかに‘晩生マナ’(タキイ種苗・渡辺採種場)を*B. pekinensis* (*B. rapa* L. Pekinensis Group)に、‘ナタネマナ’(石原種子)を雑種群、すなわち*B. rapa* L.に分類しており、‘マナ(真菜)’と称されるツケナは表現型においてかなり多様である。さらに、「野菜の地方品種」<sup>12)</sup>では、東京都江戸川区に分布する‘真菜’と関西一円に分布する‘真菜’を区別し、関西の‘真菜’は早生で‘畑菜’とも呼ばれ少し葉に欠刻があるとし、青葉<sup>2)</sup>も同様の解説をしている。これらの記述から、1) 関西地方のある地域では同一のツケナを‘真菜’とも‘畑

菜’とも呼んでいた、2) ‘真菜’は‘畑菜’に、あるいは‘畑菜’は‘真菜’に由来するという謂われ、あるいは事実があった、3) ‘真菜’と‘畑菜’が形態的に明確に区別されないため同一のツケナとした、といった可能性が窺える。

江戸時代の農書にみられる‘真菜’と‘畑菜’に関する記述を第4表に示した。我が国最古の農書とされる「清良記」<sup>3)</sup>では、「四季作物種子取事」の「蕪菜類の事」として最初に‘真菜’を取り上げ‘京菜’や‘水菜’などと併記している。また、1700年前後に記された「農業全書」<sup>11)</sup>と「菜譜」<sup>7)</sup>に京都の‘はたけ菜’あるいは‘はたけな’が菘すなわちツケナであるとの記載があり、さらに、1803年の「本草綱目啓蒙」<sup>13)</sup>には京都の‘ハタケナ’は‘真菜’であり、開花前の花蕾を食用とするほか、採油にも用いると記されている。これらが、現在の‘マナ(まな、真菜)’や‘畑菜’とどのような関係にあるかは不明であるが、同様の呼称を有するツケナあるいはカブが江戸時代の早くに存在し、江戸時代後期には‘ハタケナ’と‘真菜’を同一視する見解があり、採油に利用されていたことは事実である。また、‘マナ(まな、真菜)’という呼称は、現在、表現型においてかなり多様なツケナに対し用いられている<sup>1, 2, 12, 14)</sup>ことを考え合わせると、様々な時代と地域において多様なツケナに対して使われてきたと推察される。

在来のツケナは、主として西日本にはA型種皮の品種が、東日本にはB型種皮の品種が分布している<sup>1)</sup>とされるが、‘大和マナ’と同様に‘畑菜’、‘高山真菜’および‘姫路若菜’ではA型種皮が多数を占めたのに対し、‘関西まな’の種皮型はB型であり、福井県の‘マナ’と‘マーナ’ではA型とB型の比率に大きな差は認められなかった。このことは、‘大和マナ’、‘畑菜’、‘高山真菜’および‘姫路若菜’は、‘関西まな’、福井県の‘マナ’並びに‘マーナ’とは異なる遺伝的系譜を有していることを示唆している。

明治時代から大正時代にかけて、水田裏作の大部分を占めていた在来ナタネ(*B. rapa* L.)は、次第に地域分化して品種を形成するようになった<sup>9)</sup>とされる。菜種増殖奨励事業が開始された1930年のナタネの品種数は在来ナタネが西洋ナタネを上回っていた<sup>9)</sup>が、当時、地方農事試験場が所有した在来ナタネ83品種<sup>22)</sup>の中に、‘マナ’、‘畑菜’およびこれらに類する品種名はみられない。一方、矢澤<sup>24)</sup>は、ナタネは種子から油をとるだけではなく、関西地方を中心に在来ナタネ(一部、畑菜を利用しているところもある)の花叢が、塩漬けなどとして利用されていると解説している。

なお、奈良県には‘晩生切葉’のように系統名に‘大和’という語が付かない‘大和マナ’が存在し、大阪府の高山地区文化財調査団<sup>18)</sup>の報告では‘高山真菜’ではなく‘マナ’と記載されている。一方、福井県の‘マナ’は栽培地を流れる黒河川に

第4表 江戸時代の農書にみられる‘真菜’と‘畑菜’に関する記述

書名	著者	出版年	記述
清良記(親民鑑月集)	土居水也	不明	四季作物種子取事 … 蕪菜類の事 一、真菜…一、京菜、一、水菜
農業全書	宮崎安貞	1697年	菘 第三 蕪菁に似て別なり。唐の書に何れも別に出せり。 うき菜と云。京都にてははたけ菜と云。
菜譜	貝原益軒	1704年	菘 本草綱目、農政全書、其餘諸書を考るに、京都の、水菜、はたけな、近江のうきな兵主菜、鄕にて京菜、白菜といへる、皆菘なり。
本草綱目啓蒙	小野蘭山	1803 ~1806年	蕪菜 …四弁未ダ開カザル日前ニ中心ヲ摘、食用トス。…一種京ニテ、ハタケナト呼モノアリ。和方書ニ真菜ト云。其形状アプラナト同フシテ色淺シ。又油ヲ採ベシ。

<sup>2)</sup>1629~1654年の間とする説がある

因み、近年‘黒河まな’と呼ばれるようになった。これらのことから、奈良県と大阪府においても、元々‘マナ(まな, 真菜)’と呼ばれていたツケナが、近年、地域名を冠されて‘大和マナ’や‘高山真菜’と呼ばれるようになったと考えられる。

今回の調査では、‘大和マナ’と呼称および形態が類似するツケナの存在が福井県、大阪府、和歌山県および沖縄県で確認されたが、いずれについても明確な来歴を記述する文献は見当たらなかった。今後は、各産地から提供された系統と入手可能な在来ナタネ品種を用い、表現型や自家不和合性遺伝子に着目して遺伝的系譜を解明することで、‘大和マナ’の来歴を幾らかでも明らかにしたい。

### 謝 辞

現地調査に際し、ご協力いただいた福井県南越農林総合事務所農業経営支援部の早川直助課長、敦賀市の増田貞雄指導農業士、大阪府豊能町農林商工課の東浦進課長補佐および沖縄県北部農林水産振興センター農業改良普及課の岩本由美主任技師に深謝いたします。

### 摘 要

‘大和マナ’の来歴を明らかにすることを目的に、‘大和マナ’に類似するツケナ類の検索を行い、得られた情報をもとに、‘大和マナ’との類似性と歴史的背景を現地・文献調査し、種子の購入が可能な品種は栽培・観察した。

1) 呼称が‘マナ’に類し、‘大和マナ’と形態的に類似するツケナが福井県、大阪府および和歌山県で栽培され、沖縄県に自生した。

2) 福井県の‘マナ’、大阪府の‘高山真菜’、和歌山市の‘マナ’と‘まな’および沖縄県の‘マナ’のいずれについても明確な来歴を記述する文献は見当たらなかった。

3) 奈良県の‘大和マナ’と同様に、大阪府の‘高山真菜’についてナタネとの関連を示唆する資料は存在した。

4) ‘畑菜’、‘高山真菜’および‘姫路若菜’は、‘大和マナ’と同様の種皮型を示した。

### 引用文献

1. 青葉 高. 1964. 本邦そ菜在来品種の地理的分布と分類に関する研究(第4報) ツケナ在来品種の分類と地理的分布について. 園学雑. 32 : 311-318
2. 青葉 高. 1986. 野菜種類・品種名考 : 302-319. 農業技術協会. 東京
3. 土居水也. 不明. 清良記(日本農書全集第10巻 : 5-204. 1978. 農産漁村文化協会. 東京)
4. 北條雅也. 2006. 奈良県在来ツケナ‘マナ’の類縁関係. 園学雑. 75別2 : 514
5. 伊江村史編集委員会. 1980. 伊江村史. 伊江村. 沖縄
6. 岩本昭夫. 1998. ふくいの伝統野菜 : 46-49. 福井新聞社. 福井
7. 貝原益軒. 1704. 菜譜(益軒全集巻之一 : 209-261. 1910. 益軒会. 東京)
8. 改訂橿原市史編集委員会. 1987. 橿原市史本編上巻 : 323-347. 橿原市. 奈良
9. 菅野考巳・米元孝一・山口 隆・倉田久治. 1965. 東海近畿地域における菜種作の史的考察. 東海近畿農試研報. 13 : 70-118
10. 川合貴雄. 2002. 都道府県別地方野菜大全 : 229. 農産漁村文化協会. 東京
11. 宮崎安貞. 1697. 農業全書 巻三(日本農書全集第12巻 : 214-273. 1978. 農産漁村文化協会. 東京)
12. 野菜試験場. 1980. 野菜の地方品種 : 168-187. 農林水産省. 東京
13. 小野蘭山. 1803. 本草綱目啓蒙
14. 渋谷 茂・岡村知政. 1955. Brassica属種子の形態的特性に就いて. 園学雑. 24 : 195-198
15. 清水弘子・矢澤 進. 2000. *Brassica campestris*の種皮型を異にする種子の発芽と発芽床の含水量. 京大農場報告. 9 : 1-4
16. 泰松恒男. 1991. 奈良の野菜 第1部 軟弱野菜 : 60-63. 奈良県. 奈良
17. 泰松恒男. 1995. 大和の農業技術発達史 : 113-114. 農業試験場百周年記念事業実行委員会. 奈良
18. 高山地区文化財調査団. 2001. 高山地区文化財調査報告書 : 27-30. 高山地区文化財調査団. 大阪
19. 天理市史編さん委員会. 1976. 改訂天理市史 上巻 : 390-418. 天理市. 奈良
20. 豊能町史編纂委員会. 1987. 豊能町史 本文編 : 361-362, 504-508. 豊能町. 大阪
21. 敦賀市史編さん委員会. 1988. 敦賀市史 通史編 下巻 : 806-824. 敦賀市. 福井
22. 禹 長春. 1931. 菜種に於ける品種の特性調査. 農事試験場彙報. 1(4) : 403-421
23. 和歌山市史編纂委員会. 1990. 和歌山市史 第3巻 通史編(近現代) : 71-76. 和歌山市. 和歌山
24. 矢澤 進. 1989. 園芸植物大事典3 : 442. 小学館. 東京